

中国内陸は変化している（上）

（伊奈学園教諭） 阿部治平

はじめに

90年以後、人々は中国の東部沿岸地方と内陸について、まるでべつな社会であるかのような印象をもち、両地方の格差が中国国内のひとつの危機を醸成しているように語るようになった。これはたぶん中国研究者や中国通の人々が「華南経済圏」や「華東経済圏」、「渤海経済圏」を論じ、中国の東部沿岸地方の「離陸」と内陸のとくに農村の停滞ないしは立ち後れを強調する傾向があり、そのために中国に関心をもつ人にこのような認識が生まれたのではないかとおもう。

中国の新聞や研究誌だけにたよって黄土高原や雲貴高原などの農村に注目するかぎり、たしかに東部沿岸の都市近郊と内陸の格差は大きいし農村の沈滞が感じられる。しかし、いざ内陸の農村をあるいてみると、格差が極端なテンポで拡大し、政権の危機をもたらす程度にまでなっているとは考えられない。また都市農村間の今日的な格差は革命以来醸成されたことであって、いまに始まったことではない。それよりも内陸でも確実に市場経済の波にまきこまれ、資本の論理に捕らえられていく人々の姿は明瞭である。

農村もまた出稼ぎと消費の拡大と商品生産に血道をあげている。内陸の都市の外見は「深圳化」「香港化」が確実に進みつつある。

以下、1994年夏の貴州高原についての印象を述べる。

人の気持ちは変った

貴陽の町のレストランでとなりの四、五人連れのグループの会話が気になった。休日に貴陽の町

にやってきた軍の工場の幹部らしい。

「わたしは束縛のある結婚よりも、好きなものがつきあって、別居しているのがいいと思う。必要があればいっしょに住んでもいいけど、まあ寝たけりゃ寝ればいいのよ。嫌になったら別れればいい。そのほうが結婚して愛情のなくなってからいっしょにいるよりはずっと新鮮だと思う」

かれらのあいだで何回かのやり取りがあったあとで男性がいった。

「人間金がなければ金が恋しい。金ができれば女のあれが恋しくなるのさ」

内陸の町でこうした男女関係についてのやり取りが、誰はばかりことなく半公然と行われるのを聞くのは初めてではなかったか。とくに女性からの同棲支持あるいは性の自由についての発言は驚きであった。

「あなたの印象は無理からぬところです。‘改革開放’以来、人の気持ちはあらゆる面で変化しつつあります。性にたいする感覚も文化大革命以前とはいちじるしく変りました。それはわたしの病院のなかでも同じです」と友人の女医はいった。

彼女の話だと、もっとも教養があって高い資格をもった医師の集団でも性をめぐるトラブルがおおくなったという。これはかつてもあったけれども権力者それもかなり上層の話で、病院などという単位では非常に少なかったか、あっても極秘になっていたものだ。しかしいま小権力をもった院長クラスの幹部とか、腕がいいという評判で「紅包」（つけとどけ）がおおい経済的ゆとりのある医者は、半分公然と女性に手を出す。女性のほうでも権力者と結んでいれば何かと好都合だからこうなれば、魚心に水心だ。

友人はつい先頃昇格試験を受けた。自分ではかなりできたつもりだ。しかし昇格は無理だろうという。幹部と愛人関係にある女医が昇格するから。親しい女性を別荘に連れて行って腹上死した幹部がいたが、これはさすがにスキャンダルになったという。

医者のおおいトラブルは「保姆」（おてつだい）をめぐる問題である。多くの医者とはともかせぎだ。「戸口」制度が緩み、農村から都市への移住がわりに自由になるとおおくの家庭ではおてつだいを雇うようになった。若いおてつだいと夫との間に関係が生じ、妻が怒って離婚するものがある。度胸のあるおてつだいのなかにはおくさんの外出中、その夫の前で素裸になって誘惑し、とうとう旦那を横取りしたという人もいる。田舎からでてきて町のお医者さまの奥方になったとすればこれは出世物語だ。

同じ医者でも資格が低いものは労働者と同様の賃金しかない。資格が低いとプライドも低い。そこでなにか金になることをやろうとすれば自分の身を売るしかない。わずかだが医師のなかにも金のために貞操を無視するものもある。

これがより若く教養の低い看護婦クラスになると、「社会主義的市場経済」のもとにわかに豊富になった流行の商品に夢中になる。病院の住宅団地で、となりの労働者を見れば、昨日まで病院で肉体労働に汗を流していたものが、思いきって「下海」をして、タクシーの運転手なり食べ物屋なりをやった結果、運のいいやつは金持ちになっている。カラーテレビはもちろんビデオも贅沢な音響機器もある。外出のときにはどこかの役人の何さま、という格好をしている。

それにひきくらべ看護婦の収入は月200 元内外である。流行のスーツが月給と同じかものによっては2 倍くらいではなにを買うといってもゆとりがない。こうなると消費熱に直撃されているから、売春が金になるとなればそれに走りやすい。売春

はかぎられたものがやるにきまっているが、いったん始めたら止らない。

性病患者はいま増加中である。そのなかでも治療がむつかしい、耐性菌に犯されたものが増えていく。麻薬中毒者同様、むつかしいケースは公安が管轄する隔離病院におくっているが結果は知らされていない。聞くところによると公安は金を積むとかれらを退院させているという。

だから感覚がかわったのは若者ばかりではない。社会全体がかわったのだ。

「若者の性についての考え方が大きくかわったのはやはり金銭第一主義がその基礎にあります。社会主義になって以来、性を論じたり、表現したりするについては極端な制限がありました。それが80年代になって突然半自由化されたような、お上がお目こぼしをするといったような雰囲気になりましたから小説も性描写がおおくなりました。

免疫がないところにいきなり女性の裸が登場したら若者は急速にかかります。直接には台湾、香港、日本などのビデオが密輸され、一般人の目にふれることがおおくなったことが強く影響しています。ビデオの映像は活字よりは直接的です」と女医は語った。

売春

「家庭が貧困のために貴陽市で売春をしている農村の娘などいませんよ。それは探せばいるかも知れないけどわたしの守備範囲じゃありません」

こう教えてくれたのは公安（警察）の中級幹部をしている友人であった。この町の映画劇場や体育館のなかの「夜総会」（キャバレー）やおおきなホテルの周辺には、流行のスタイルというよりは、けばけばしい服装の若い娘たちがたむろしていてなんとなく怪しげである。わたしは貴州省は中国一の貧困省だからこの娘たちはもしや身売りをしてきたのではないかと思った。

「彼女たちは売春婦ではないか」「全部が全部

そうではない。飲みについて女のこから話を聞いたらいい」というのが公安の友人のすすめだったから、初めて中国のキャバレーに行ってみた。若い女性がわたしのそばにきた。最初は警戒して客との応対については話さなかったが、わたしの下手な標準語をきいて外地から出張でやってきたモンゴル民族だとおもってくれたので100元のチップを出して話をきいた。

「わたしは働いていた工場がつぶれかかったのでここにやってきました。工場は電気関係の部品をつくっていたけど、製品の質が悪いので売れなくなって給料が払えなくなり、従業員はみな自宅待機だといわれたのです。困っていたら知合いがお金になるところがあると教えてくれました」

客は高い金を払って酒を飲みカラオケで歌うが、かなりの人は女のこが狙いだ。かれらは気にいった女のこがいるとくどく。女のこが承知なら「老板」（主人）にたぶん500元くらい払って女を連れだす。彼女たちは「出去」と呼んでいる。男と寝る部屋は取ってある。部屋代は客負担。「大款」（金持ち）は1000元くらいくれる。たまにガールフレンドのいない労働者がやってくる。かれらは一年中働いてためた金で女と寝ようとする。だけど女にやれる金は500元くらいだ。

「ですから貧乏人からは安く、金持ちからはたくさん取るということですが、金のない労働者などにはいい女のこはつけられないということでしょうね」

男を老板が紹介することもある。こうした客を虫がすかないからといって断ると叱られる。しかしこの頃は「出去」もむづかしい。公安がわなに掛けて女たちから罰金を取ろうとするからだ。

次は、ちょっとした酒巴（バー）で知合った女のこの話。

このこも公安を警戒したが、わたしが「蒙古族」だというと、バーの3階に個室があるからそこに行こうという。100元出せというのを3階は勘弁

してもらって、60元に値切って話しかけてもらう。

「わたしは凱里からきたものです。両親は農民です。初級中学卒業後ずっと両親といっしょに農業をやっていました。「改革開放」後、戸籍の制度がゆるんでわりに簡単に汽車や長距離バスの切符が買えるようになり、宿泊にもうるさい届け出が必要でなくなったので、まわりの若者のなかには貴陽や成都にいく人がいました。わたしも町にいきたいと思っていました。農村はどこでも同じようなものですが、町に行けばなにかいいことがあると思うでしょう」

そこに彼女のいところから貴陽にでてこないか、という手紙がきた。16歳のときだ。彼女は仕事を紹介するという話しにすっかり喜んで洗濯屋をやっているいとこのうちを訪ねてきた。いとこ夫婦は彼女のために部屋を用意してあり、彼女を喜ばせた。

「夜中に重苦しいので目をさますと、誰かがわたしの上にのっています。下腹部に強い痛みを感じて叫んだのですが、誰も助けにきません。男はわたしを弄んで夜明けにでていきました。翌朝、わたしはいとこのようすでわたしを金持ちの男に提供したことが分りました。わたしは公安に訴えるといいました。いそこはわたしが怒ったのでわたしに金をやるといいました」

それは500元であった。田舎では両親が一年中働いてようやく手にできる金額である。彼女は黙った。あとでいそこはその処女好みの金持ちの男から2000元を受け取っていたことが分った。

彼女はほかに勤め先がなかったのでマッサージ室につとめた。簡単な手ほどきをしてもらって仕事を始めたがそのうちマッサージの老板も男と寝るように要求しだした。嫌気がさして、いとこのところに戻るとこれも男を取れという。いやだというに出ていけといい、乱暴する。虎の子の500元も取り上げられた。こうした気持ちで田舎に帰

るのは気が重い。そこでやむなく男を相手にした。男はたいいところが紹介する。出張でやってきた男、それに軍人がおおい。軍人はしつこくて嫌だ。

いとこはおもてむきは洗濯屋だが実際はぼんびきだ。いとこが客を紹介し、いとこの部屋を使ったとき収入の3分の2を彼女が、3分の1を彼が取る。

「公安？たしかにうるさいわね。わたしたちを捕まえると、100元くらいの罰金を要求しますがたいいでは金額は公安の気分しだい。法外な金額を要求して払えないとなると、じゃ、おれと寝ろ、というのです。病気になったことはあります。いつか1日20人くらい相手をしていました。そのうちおりものがおおくなったので医者にいきました。淋病でした。幸いにもわりにはやくなおったのでまた客をとりだしました。いまは1日3、4人です。

コンドーム？使えません。客がいやがるもの。
‘愛滋病’（エイズ）？心配しませんよ。心配してどうなるものでもない。あなただって飛行機でこの町にきたのでしょう。飛行機がいつ落ちるか分りますか。それと同じです」

彼女の希望は金をためてなにかの店をだして稼ぐことである。年をきくとまだ18歳であった。

タクシーの運転手でその方面にはくわしいという人がいた。

「女を欲しがるのは軍人がおおいね。あとは出張で貴陽の町にきた人。将校クラスの連中は金がある。軍の工場はこの頃電気製品なんかつくって金もうけをしているし、軍には税金をかけないから自由になる金があるんだろうね。かれらは休日になると貴陽にでて来て、女はいないかとくる。女のこは酒吧や舞厅で紹介する。でもその女のこが全部‘野鶏’（売春婦）じゃない。わたしは老板に話す。老板が紹介する。客は女のこと食事をしながらお楽しみの価格を相談する。町の食堂

より倍くらい高い飯を食い、実際には5元か10元くらいのキャラメルに100元もだして女の品定めをするのさ。だいたい500から1000元の間じゃないかな。この間なんか大侃風をふかせて1万元女にやったやつもいるよ。

軍人（将校）クラブを知ってるかい。あそこじゃ‘蘑菇房’（きのこの家すなわちパンガロー）を提供しているよ。シャワー、ベッドつきだ。あそこに連れ込む女のこは高いよ。1000元から2000元。賭博場もあって、ルーレットや闘鶏をやる。金持ちのぼんぼんがきて一晩で十数万元を使うこともあった。軍人クラブにカップルを一つ提供すると50元から100元のリベートがある。運転手としちゃあ有難いね」

外国企業の進出にともなって外国人が売春婦を買うこともある。女が黒人とのつきあいのなかで妊娠して、中絶の時期を間違えて出産したあげく、嬰兒を殺した事件もある。

「それどころじゃない、大学生が売春容疑で捕まったことがあります」

と例の公安幹部はいった。この話は当の大学の教授から確認できた。女子学生は貴州飯店に部屋をかりてやっていたという。

「売春は犯罪として処罰することはない。つまり裁判にかけ、労働改造所に入れるということはありません。本人のあやまちとして説諭し、罰金を取るだけです。貴州の娼婦の70から80%は病気があると思っていい。先生、あなたも注意しなさいよ」とこの友人はまじめな顔をして忠告してくれた。

「長包女」とよばれる特殊な高級娼婦も登場した。深圳、広州方面でまず登場したようだが、特別に教育された金持ち用の女性である。これが90年代になって貴陽にもあらわれた。

出稼ぎの実態

貴陽の町ではふるい建物を壊し、町並みを整備

している最中だった。伝統的な瓦葺きの家が土ぼこりのなかで崩れていくのを見るのは、京都の優雅な町屋がコンクリートのビルに変るのを見て身にはつらかった。貴陽の町はあちらこちらで道路がはじくりかえされ、交通渋滞が起こっていた。そこで力仕事をしているのは地方からできた人々で、1日10元程度の賃金で土まみれになっていた。穴ほり、煉瓦運び、高い足場のビル建設。みな出稼ぎ農民である。働く農民は貴州だけではない。四川省の農村からの人もおかった。かれらは「川軍」とよばれていた。田舎からあてもなくできた人が貴州駅の回りに群がっていた。

「いくら改革開放といってもいきなり仕事にありつける人はいない」と公安幹部はいった。

「待業青年なんて、それはことばの遊びだよ。無業青年なんだ。待っても無駄だ」

食えない若者は貴陽の町で「団伙」になる。日本の暴力団のように統率されない、一時的なちんぴら集団である。「川軍」の「団伙」は貴陽の公安にとって悩みの種である。こそ泥から殺人まで犯罪にからむ「川軍」はおおい。

さて一般には農民はあそこに行く仕事があるらしいといったうわさや、いい働き口をもってきた人を信用して、村のなかのもっとも知恵のある人物を指導者にひと塊りになってでかける。しかしそれは必ずしもいい結果をもたらさない。

広東省東莞市のハンドバッグ工場を見た。ここは深川から100キロは離れているが、広州市との中間にあって、この数年急速な発展をみた町である。この工場の労働者の大半は四川と貴州の農民出身で学歴はたいてい小学校をでただけである。現地住民は少ない。

労働時間は朝7時から夜中の12時まで。14時間労働である。朝7時から12時まで仕事、12時から2時まで昼食昼寝、2時から6時まで仕事、6時から7時まで夕食。7時からの仕事は残業あつかいで給料は20%増しになる。

かれらの賃金は基本給が200元から500元の間で格付けされる。休日は春節の休み以外毎月1日である。機械的に計算して、かりにかれらの月労働日が29日だとすると、毎月5時間の残業をやりとすれば300元の基本賃金のもので170元弱の残業手当がつくから月給は470元、500元の場合は266元の残業手当がつくから月給は766元となる。ボーナスなどは一切ない。

食事は工場側が負担するとはいえ、わたしが見た昼食は白米飯に揚げた鶏の足先1本とトーガンの煮付けだけ。住宅も工場がわで無料で提供することになっているが、これが2段ベッドの14人部屋で、扇風機が1台のほかにも設備がない。工場のなかは、いたるところほこりが舞い上がってかりにもきれいだとはいえない。そのうえ扇風機は1台で、最高気温の極値が40度Cにもなる東莞ではきびしい労働環境といわねばならない。娯楽施設はなにもない。あっても楽しむ時間がない。聞くところによると娯楽といえ、男が女の部屋に忍び込み、夜をと共に過ごすこと。14人部屋のほかの人はみな知らんぷりをしている。ちなみに男女比は1対4で女が80%を占める。

ホコリがたちこめた職場のなかでは、労働者はみな動作は鈍く無表情で無気力な感じである。わたしが訪ねたときちょうど昼食のベルになった。かれらは途中の仕事も放り出して一瞬のうちに消えてしまった。

貴陽の街頭の看板には薄い黄色い紙に墨汁で書いたたくさんの求人の「お知らせ」が張り付けてある。たいていは繊維衣料、皮革、電気などの工場労働者の募集で条件はいい。働く場所は貴陽だけでなく、広東省などの町もある。月500元くらいを保証しているものがおおい。労働者にたいしても高級中学卒業程度とか、初級中学とか、学歴は問わないとか条件を示している。みていると1週間に1回くらいは張り替えられているようだ。

「あの条件はあてになりません」と友人はいっ

た。だから問題がしょっちゅう起こるといふ。

1週間後、四川省成都の錦江のほとりにある「労務処」（職業紹介所）にいった。3元払えば細長い建物のなかに入ることができる。わりに清潔な服装をした、しかしかなり日にやけた男女がおおきな部屋のなかで、ベンチに座ったり、窓に腰掛けたり思い思いの姿勢で仕事の口が掛かるのを待っている。

中年の女性が十代の女性のグループを誘っている。食住つきで月給は150元、職種は工員。

「だめだめ、安すぎる。300元くれなきゃいけない」

中年の女性は汗をかきながら口説くが、女のこたちは相手にしない。わたしもかまを掛けてみた。聞いてみると「保姆」がそもそも300元が相場だという。

「貴陽の町で‘保姆’はどう。300元出すけど」

保姆はいやだね、面倒がおおいから、という返事であった。日本でいえばお手伝い兼子守りだから、それに貴陽は田舎町だから若い娘はいやがるかも知れない。ここでは金になれば何でもやるというのではなさそうだった。

契約が成立したらしい中学2年生前後の小柄のむすめが、家庭の婦人らしい人と紹介所の女性係官のまえですこしもめているようすだ。そばにいて立ち聞きをすると、「保姆」の口がかかってきて本人もいく気らしい。だが、「自分の身分証明書をその婦人が取り上げた。もし返してもらえないならわたしは家にかえれないし、仕事をかえることもできない」と必死の表情で訴えている。

婦人のほうも一生懸命に「もし、あんたがわたしのところが嫌になったら、いってもらえばそのときは身分証明書を返してあげる、ね」と説明している。

「労働条件はこの契約書にかいてある。問題が起こればここに来たらよろしい。法律上の責任を追及してやる」とそっくり返った女性係官はいふ。

しかし身分証明書を女のこに返すようにはいわない。月給をもらって逃げるのを防ぐために身分証明書を雇い主が保管することは習慣になっているらしい。心配顔の女のこもようやく納得して契約書に署名をした。婦人は係官に登記料として15元を払った。女のこは婦人のスクーターの後ろにのせられて去った。

看板には労務契約の標準とすべき事項が掲げられている。だいたい以下のようだ。

労働の内容、日労働時間、試用期間、本工になってからの待遇、食、住の条件など契約書に書かなければならない。

雇い主は契約にもとづいて労働の内容を点検する権限がある。約定にしたがい定期的に賃金を支払うこと。労働者の人格を尊重すること、とくに女子の住居の安全を保証すること。労働者は労働契約にしたがい、雇い主の利益を守れば約定の待遇を受ける権利がある。工作中的の事故は雇い主の負担であるが、慢性病は雇い主に責任はない。雇い主が労働者に危害をくわえたときは法律上の責任を問う。過失があったときは相応の負担をする。労働者が故意に雇い主の財物を破壊したときは損害を賠償する。過失があつてそうしたときは状況によって負担する。

臨時的な労働についても一応の標準が示されている。賃金は1日8時間労働で10元から15元、4時間で6元から10元、1時間あたりは2元から5元である。雇い主は支払い賃金の10%にあたる金額を本事務所におさめること。賃金の支払いは雇い主が直接やってもいいが本事務所が代行してもいい。

なるほど、改革開放政策の準用で「労務処」の収入も確保できる規定である。

壁には「警鐘」と書かれた黒板新聞がある。

“今年5月29日屏山県の武朝営、安県の張祥偉など25人は、わが事務所の近くである親方から調

子のいいはなしを聞かされて、個人的な紹介で山西省の臨汾県にいき、于廷鎮道橋公司の八処で道路工事にしがった。かれらは契約を登記しなかったもので、仕事の内容、労働時間、賃金など分らないままであった。いってみると生活条件は悪く、14時間という長時間労働で賃金も保証されなかった。文句をいうと怒鳴られたりぶん殴られたりした。こっそり逃げ出して太原の駅に3日歩いてたどり着き、派出所に訴えて証明書をもらい成都に戻ってきた”

“仁寿県の女子青年鄭さんは6月24日に人買いの李明琴をわが事務所につきだした。彼女は果物を売る仕事をやって欲しいという李の甘言にさそわれて、向なんとかという女性といっしょに山西省の田舎に連れていかれて売られ、農家の嫁にされてしまった。家人のすきを見て逃げ出し成都に戻った。その後たまたま当事務所近くで李を見かけて捕まえたものである。向さんの行方はいまもって不明である。

これで具体的な契約を登記しないと危険であることがわかう”

要はちゃんとした契約をして役所に届けなさいという警告である。登記しておけば法によって処置してやるというのだが、求職者は職業紹介所に入るのに3元、契約の登記に15元も取る。雇い主は臨時工の賃金の10%をおさめなければならない。

警告にいう「わが事務所の近く」とはどんなところか。外にでてみると錦江のほとりには職業紹介所のなかにいる人の二倍くらいの人が群れていた。そこにも職をめぐるやり取りがあった。若い人がほとんどで、おおくの人は仕事のくちが掛かるのを待っていた。そのなかを泳ぐように手に鞆をもった個人的な斡旋業者らしいのが交渉して回っていた。当局は個人契約を戒めながらもこうした斡旋業者を取り締まるわけではないのだ。こういうなかに人買いの李明琴みたいな男がいるの

であろうか。

なかに流行の上下を着た華やかな一団があった。見ていると腰にポケベルをつけ、手に携帯電話をもった若い男が近づいた。女性を中心にいた女性に話しかける。こちらもこっそり近づく。

「うちのボスが、今日女のこをなんにんか欲しいといっているが」「いくら？」

(金額が聞き取れない)

「だめ、そんな値段じゃうちのこは回せない。

みんな若いんだもの。それにこないだ、あんたとこの客はうちのこを乗り逃げしたよ。ジ、マーラカビイ！」

「ジ、マーラカビイ」は女が絶対にくちにできないことばだから、立ち聞きしている当方は驚く。ここでは労働力だけでなく性も取り引きされているのだ。「今日は稼げそうだね」というせりふを聞きながら、この若い女性たちが管理されて売春をしていることに気がついた。売春のかたちは貴陽より成都のほうが進んでいる。まさか前借金で縛られているとか、止めようとしてもやめられないとかいうことはないだろうな。

都市の人々—庶民は相対的に貧困化する

たしかに貴陽は豊かになっている。88年当時と比較して車の量がちがう。倍近い。ある日曜日の朝、北京路にたって往来する車の数をかぞえた。7時22分から5分間に62台、それから30分後にも5分間に56台が通った。そのうちバスは全車両の27%、タクシーは33%、輸送用のトラック20%。平日にはトラックが多くなるのは推測できる。そのほかは会社の送迎バス、マイクロバス、三輪トラックなどである。タクシーのおおきが目立つ。これだけ利用者がいるということだ。タクシーにメーターはついていない。交渉で料金をきめるが、ほぼ基本料金も10元、市内をほぼ端から端までとおって10元だから月給500元程度の一般庶民のふところぐあいからすればかなりの金額になる。

車がおおくなったかわり、環境問題も目立ちました。街頭に5分間立っているとその廃気ガスのために喉がいたくなる。石炭が基本的な燃料であること、貴陽が盆地だから汚染された大気は拡散しにくいということなどもある。が、やはり車の増加が原因だろうと思われる。7年前に貴陽を訪れたときよりももちろん大気汚染の程度はひどくなっている。街路樹のプラタナスは夏だということのかなりの枝葉が葉脈を残して黄色に枯れ、落葉がはじまっている。7年まえこういうことはなかった。

政府職員葉さん。女性、32歳。彼女の仕事は職権にまつわる賄賂などぜったいにない職種である。副収入がまったくない。94年のハイパーインフレは彼女一家の生活を直撃している。

日常の食品、衣類など消費物資は1年まえと比較して30から40%上がっている感じだという。去年夏と今年の8月と比較すると、米1キロ1.6元から1.8元したものが2.4元になっている。タマゴは3.1元が4.1元に、食用油は2.3から2.4元したものが3.7から3.8元になった。米は50%、タマゴは32%、食用油は60%の値上がりである。

賃金は7月まで月200元。政府が職員の給料を値上げする意向をあきらかにしたら諸物価はぼんとあがった。その公式文書が下達されたらまた上がった。いよいよその時期（7月）が来たとなったらまたまた上がった。昇給した給料はまだもらってないが、360元になるはず。旦那さまと合せば420元あまりの増収だ。うれしいけど物価の値上がりで帳消しになっていて生活の向上にはつながらない。

彼女の心配はこれから小学校に上がる息子の教育である。いま貴州の幼稚園は毎月120元かかる。音楽、絵画それに生活上の常識などある程度の教育としつけをしてくれる。そのうえ三回の食事がついているとはいうものの1年1440元である。

これが小学校に上がれば年間150元をおさめる。重点小学校に上がるとなれば200元である。重点小学校は設備もいいし、先生も優秀だという。みんな一人っ子だから重点小学校に入れたがる。もし学区外からとか年齢が学齢期に達していない子どもを重点小学校に入れようとすれば、入学まえに9000元を支払わなければならない。それに年間200元かかることは学区内の児童とおなじ。葉さんのところは幸いにも重点小学校の学区内だから9000元は助かる。

中高校は一般には学区内の学校に上がる。重点学校では学区はなく試験をやる。だいたい毎年300から500元かかるといわれる。大学は学校によって授業料がことなるがだいたい毎年3000から6000元といわれる。改革開放政策の一環で、国家が大学生を丸抱えし、わずかとはいえこずかいまで出していた従来のやり方を変え、自費でまかなうことになった。このため貧乏人は大学にはいけない。しかし新教育政策は悪いことだけではない。大卒者を政府が分配していた従来方式とことなり自分で職業を選択できるからである。

とはいえ幼い子どもの将来を考えて、葉さんは嘆く。「政府職員がひとつも悪いことをしなかったら、どうして子どもを中高校から大学にやることができるでしょう」

当面の物価高を乗切るためにもなにかしなければならぬ。そこで葉さんのご主人は昼間は政府職員として働き夜はタクシーの運転手をする計画をたてている。

タクシー会社ないしは他人の車に運転手として乗った場合、貴州では持ち主に250元から300元を上納しなければならない。一般には1台の車を2人の運転手が動かしている。昼夜べつな人間が上納する額は昼担当150元（1800円）から200元（2400円）、夜担当80元（960円）から100元（1200円）である。一人でやる場合よりも上納額はおおくなる。もし自分の車であれば昼夜あわせて500元の

粗収入がある。

94年9月現在、タクシーの経営権の価格は16万元(192万円)から17万元の間である。いま貴州のタクシーの車種はほとんどが「奥拓車」である。これは7万元(84万円)前後する。奥拓車はまもなく天津の「夏利轎車」か奥拓車の第二世代の新型車にとってかわるといわれている。これは9万元(108万円)前後する。だから経営権と車の購入費をあわせて26万元前後は必要である。かれは親戚のものといっしょに1台のタクシーを使って昼間は親戚の若者が営業し、夜はかれが運転する計画を立てている。ただ資金が足りない。これをどうするか。

あるタクシーの運転手の話しでは、数年まえ20万元(240万円)で、中古車の入手や役所への手続きなど全部まかなってタクシー業を開始したという。税金を取られたあと一日350元の収入になる。それは低賃金の政府職員の月給に相当する。かれは5年でもとをとるといふ。車の寿命は7年くらいだからあとの二年くらいは黒字をうむ勘定になる。べつな運転手はタクシーの運転を請け負っている。雇い主に1日1000元の賃借料をはらう。雇い主は5、6台の車をもつ医者だという。残り自分のものになる。かれは陽気にいった。

「やりがいがあるよ。頑張れば頑張っただけ収入になるもの」

四川で乗ったタクシーの運転手はなまりがあるとはいえきれいな標準語をつかう。岷江をさかのぼりたい、という「妻を同乗させていいか、二人で交代で運転して妻に運転を習わしたい」ともちかけてきた。中国ではこういうことはよくあるから、「そらきた」と承知すると見るからにインテリという風情の奥さんがやってきた。聞いてみると旦那は中医学の副院長である。中国では医者には「紅包」など副収入があるものだと聞いていたからこれには驚いた。

「わたしは個人で診療所をやっていないから少

ない月給に頼らなければならない。こどもの教育のことを考えると確実に金をかせがないとやっていけない。家内にも免許を取らせた。これから夫婦でタクシーをやれば月給をあてにしないでもいい」

ある農村出身の若者の成功物語をしてみよう。かれは湖南省の片田舎から伯父をたよって貴州にきた。3、4年は荷物かつぎなどの臨時的な仕事をやりながらこがねをためた。職場でつきあっていた女性と結婚し、貴州郊外の彼女の村に住むことにした。家は自分たち夫婦が煉瓦をつんでつくり、一階は店舗、二階は住宅にした。そこには公営の商店があったけれども、ほうばうにプレゼントを贈って営業許可を取り、雑貨店を開いた。若い主人はいま仕入れ専門。しかし、かれは小さな店舗の限界をよく知っている。この店ではもう売上げは伸びない、といった。このまま満足する人ではないから新しい仕事に進出したいと考えている。なにをするか、タクシー業かトラックをつかった運輸業か。いまかれは運転免許の取得中である。

かれの伯父さんは革命幹部で貴州省でも地位の高い人物だったが、文化大革命の初期に右派分子として失脚した。その後はおもて舞台にでない。

「わたしは日本軍の侵略、とりわけ伯父を目の前で殺されたことをきっかけに抗日戦争に参加し、革命運動にくわわり青春をささげた。何年も辛酸をなめた。にもかかわらず家といえはこのせまい退職者用のアパートしかない。年金もインフレのためにほんとうに使いでがない。ところがこのおいはどうですか。自分で家をたて商売をやり、なお事業を拡大しようと努力している。たいしたものだ」

(次号へ続く)